

Afterword

(少し長い) あとがき

2019年は実に慌ただしい年でした。ただ、それは単に忙しかったという意味ではありません。そうではなく、この一年のあいだに、マンガを巡る文化的、社会的、そして国際的な「ものさし」が揺さぶられ、私たち国際マンガ研究センターにもその余波が押し寄せた…というより、まさしくその渦中にいたためです。

ここでいうところの「ものさし」とは、主にマンガの原画や展示に対する評価軸のことを指しています。

5月に大英博物館で開幕した「The Citi exhibition Manga」は、日本ではマスコミからも好意的に報道されましたが、「あの大英がマンガを扱った」ということで、国外では当初、賛否両論に分かれました。結果的に約3ヶ月で18万人を動員、特に若者の来館層が増えたことで成功裏に終わりましたが、会期終盤の8月末に私たちが訪れた際、さまざまな趣向の中でも際立っていたのはマンガ原画に対するこだわりでした。約50名もの人気漫画家の原画が一堂に会した展示構成には、美術品に劣らぬ対象としてマンガを扱おうとする意志や大英博物館ならではのプライドを感じました。

これに対し、7月に韓国の釜山グローバルウェブトゥーンセンターで催された展示では、施設名通りウェブトゥーンがメインであり、原画はほぼ存在しませんでした。その代わりに、隣り合わせで鑑賞すると絵の方に隠された物語が浮き出る作画工程の動画を配置したり、縦スクロール用のデジタルデータを特殊加工して大型パネルで飾ったりと、随所に工夫が凝らされていました。周知の通り、韓国はデジタルマンガの先進国ですが、その自覚のもと新たなマンガ展の可能性を追求しつつ、展示物としてのマンガ原画の存在意義を問い直す、実験的かつ挑発的な試みだったと言えます。

そして9月に、この英・韓の展示を通じて得られた知見と人脈を活かす機会が、私たちに訪れ

ました。初の日本開催として京都に招致した「国際博物館会議 (ICOM)」でのパネルセッション「〈マンガ展〉の可能性と不可能性 英韓日の比較から」がそれです。上記の展示を担当した両国のキュレーターに加え、日本からは私たちが登壇し、いわばマンガという「異物」がミュージアムという空間や制度に何をもたらすのか、600名近く集まった国内外の博物館・美術館関係者の前で意見交換することができました。

翻って、国内の同年の出来事に目を向けると、5月にリニューアルオープンを迎えた横手市増田まんが美術館では、マンガ原画70万枚が収蔵可能な施設環境が整備されました。現在も、明治大学米沢嘉博記念図書館や北九州市漫画ミュージアム、そして私たちと一緒に、文化庁の事業を通じてマンガ原画アーカイブの全国的な連携を進めています。ところがその一方で、10月に発生した台風の影響により、川崎市市民ミュージアムが深刻な被害を受けてしまいました。数十万点の資料を保管していた地下収蔵庫が冠水、今もレスキュー作業が喫緊の課題となっていますが、その中にはマンガの原画や雑誌も含まれていました。

この二つの出来事は別の動向に見えますが、どちらの館も自治体が運営しているという点では同じ課題を抱えています。それは「私たちの税金を投じてまでマンガを収蔵することにどんな意義があるのか」という、地域住民の素朴にして本質的な声に対する説明責任です。もちろん、京都市と私たち京都精華大学が共同運営している京都国際マンガミュージアムにも同じことが言えます。

では、はたしてマンガの原画や展示が有意義なのは「あの大英博物館でも展示されるほどだから」でしょうか。あるいは、博物館や美術館でマンガをアーカイブするのは「国際会議でも注目されているから」でしょうか。さらには、自治体が著名な漫画家の記念館やマンガミュージアムを設立するのは「地元の誉れや観光名所になるから」でしょうか。

もちろん、そうした意見を否定するつもりはありません。国際的な価値付けや地域住民の理解

はとても大切なことですし、私たちの活動でも常に留意しています。ただ、これだけでは、肝心の「マンガの価値」や「マンガミュージアムの意義」そのものを説明するには、やはり不十分なのです。決して大げさでなく、国境や地域を超えたレベルで、つまり、普遍的な意味での世界や社会、そして人間にとって、「マンガとはいかなる存在なのか」を問わなければ、いくら聞こえの良い評価を持ち出しても、それは国際的基準や世界的権威が信頼（盲信）されているだけであって、マンガそれ自体に対する理解の深化や新たな発見が生じるわけではありません。

あるいは、そうした問いこそ、自治体や産業界ではなく、大学などの専門的な研究機関が向き合うべきテーマなのでしょう。マンガに限らず、そもそもアーカイブとは、五年や十年でなく、百年の計を以て後世に遺すべき対象を選定し、それを実行するための方法と人材、そして覚悟が求められる行為です。その意義や真価は毎年の入館者数や一時的な経済効果だけで測定できるものではありません。

では、マンガのアーカイブやそれを活用した展示の意義は、何によって測られるべきなのでしょう。残念ながら、ここで即答することはできません。ただ、そのための「ものさし」を、どこかの誰かに提示してもらうのを待つのではなく、私たちのようなマンガの研究機関が主体的に模索し、具体的に示すべき時が近づいていることは実感しています。とはいえ、何も唯一の「ものさし」に固定する必要などありませんので、試行錯誤を繰り返しながら、より良い評価軸を探し続けることを前提に、です。

以上、「あとがき」にしては少し長く、大上段に構えてしまったかもしれませんが、こうしたことを考えてしまうほど、私たちにとって2019年は濃密な一年となりました。本年次報告集・第3号から、そうした想いの端々を感じ取っていただければ幸甚です。

2020年3月

吉村和真（京都精華大学マンガ学部教授）